

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520710

研究課題名（和文） 日本・中国・台湾間の仏教における伝統の継承と近代の変容に関する史的研究

研究課題名（英文） Historical Studies of Inherited Tradition and Modern Transformation in Buddhism among China, Japan and Taiwan.

研究代表者

松金 公正（MATSUKANE KIMIMASA）

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：50334074

研究成果の概要（和文）：

本研究では、植民地期の台湾において仏教という存在が、如何に歴史的、或いは伝統的存在として位置づけられていったのか、その過程について史的研究を行った。とくに日本と中国の仏教勢力によって、台湾の仏教がどのようなものとして捉えられていたのかという点の分析を通じ、台湾の仏教のいかなる部分が切り取られ、仏教の歴史や伝統、そして近代化と結び付けられるのかについて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research focuses on the process of Buddhism being regarded as a historical or traditional culture in Taiwan during the Japanese colonial period. It examines the Chinese Buddhists' influence in Taiwan and significant occurrences caused by Taiwanese inhabitants. I analyze how the inhabitants interpreted those occurrences and made them a part of their own history and traditions. "History" and "tradition" have been constructed and given meaning in Taiwan under the influence of both Japan and China. I maintain that Taiwanese inhabitants developed Buddhism into one of their vital cultural resources.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国・仏教・台湾・日本・植民地

1. 研究開始当初の背景

日本の仏教史研究は、宗派関係者がその中心的役割を果たしてきたこともあり、日本仏教の現代的価値観及び関心により、また国内の文献史料のみを用いて、思想研究の立場より東アジア仏教を考察する傾向が強かった。

このため、仏教は東アジア地域に共通して存在する宗教としての側面が強調され、地域間での差異やその差異を形成するに至った社会的背景等を考察することは必ずしも多くなかった。そして、近代日本仏教徒の東アジアでの活動・展開を取りあげる場合、先人の

努力や高邁な意志の賛美か、戦争責任の断罪という相反的な立場に陥りがちで、まずは何がなされたのかを調査するという立場はこれまで重視されてこなかったという現状にある。

他方、中国・台湾の仏教史研究は、教理史研究が中心的であり、社会と仏教との関係を考察する研究は、1990年代中ごろまで進んでいなかった。しかし、この10年は内外の史料公開にともない、近代化と仏教に関する実証的な研究が進められつつある。とくに台湾では、江燦騰、鬮正宗、釈慧巖など、植民地支配と近代との問題を日台双方の史料を用いて捉えようとする研究者が出現している。しかし、日本側の史料の収集は、台湾総督府関係史料の分析が若干の進展をとげているにとどまり、国内外における史料収集及びフィールドワークは現在の課題といえる。また、日中台という視角から近代仏教を考察するという研究も十全に展開しているとはいえない。

さらに、日台間の仏教の近代化にかかる研究については、一定の成果があるが、それはすべて植民地時期の研究にとどまり、植民地時期前や戦後との連続性・非連続性を考察するような研究は少ない。また一方で、植民地台湾の近代化が論じられる際には、日本において確固とした「近代」が構築され、それがそのまま台湾に導入されたとされやすく、当時の日本における「近代」への試行錯誤やゆらぎといったものをあまり考慮しない傾向がある。

これは諸先行研究が日本の先進性を強調する台湾総督府関連文書をその基礎史料として無批判に使用してきたこと、また、台湾人研究者の多くが、台湾のみを専門的に記述した文献を用い、同時代の日本内地文献等をあまり参照してこなかったことが主要な原因であると思われる。

このため、報告者はこれまで日台所蔵史料双方を活用しつつ、日本各宗派の台湾布教について、総督府による宗教政策との関わりという側面から考察してきた。そして、各宗派が台湾布教に求めていた志向と総督府の宗教政策との間にはズレがあること、また、各宗派が台湾社会に対し積極的に教育事業等を推進していたことなど、具体的な日本仏教による台湾仏教近代化の諸相を明らかにしてきた。

そこで、本研究では、先行研究で欠落していた日中台仏教の相互関係を、行政文書等の文字史料、及びフィールドワークにより、多面的かつ実証的に考察することを試みることで、上記諸問題に対する解決を目指した。また、日中台三地の仏教の接触・交流を、異文化接触による文化変容過程との視座から捉えなおそうとする点、台湾と中国双方

で実地調査を行い、比較検討するという点は、これまでにない新たな視角を提供するものといえる。

報告者は、研究開始時に本研究の実施の前提となる研究成果の一部は、論文として、すでに部分的に公表しており、日本植民地統治期の台湾における日本仏教と台湾仏教との相互関係について、日本仏教各宗派の台湾での布教活動を掘り起こすというミクロな視点から論を立ち上げ、詳細に整理し分析を加えてきた。しかし、日本国内の宗派関係史料には、台湾と日本との関係にとどまらず、中国への日本宗派の積極的な働きかけも記されており、また、当時の台湾と中国仏教界との密接な関係を示す史料も少なくない。

このため本研究では、東アジアにおける「伝統的思潮」と近代の変容の総体を論じるべく、従来の研究で不十分であった中国での史料をいかに収集するのかその方途を模索し、基礎的史料を収集することを中心に据えることとした。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、東アジアの近代化過程において、日本・中国・台湾に共通して存在する「仏教」という宗教が相互にどのような交渉をもち、いかなる影響を与えあったのかということについて、日本人仏教聖職者、及び仏教信者の各地域での活動と現地の人々との交渉に関する実証的分析を通じて、東アジアにおける「伝統的思潮」の継承と近代の変容との間の因果関係という視角から考察を加えることにある。

また、漢族系移民によって基層文化が形成され、日本植民地統治下で「近代」への道を辿った台湾を、近代東アジア仏教の交渉地と位置づけ、日中台三地間の相互関係・相互作用を考察しつつ、東アジア仏教の近代化の容態をみるためのひとつの視角として設定する。

3. 研究の方法

本研究は、主に次の2点によって構成される。ひとつは、国内史料の収集を通じた植民地に対する各宗派の活動分析であり、もうひとつは、台湾、中国の現地史料収集を通して進める日台間の仏教交渉過程の実証的研究と日中間の仏教交流の実態解明にある。

これら日本・台湾・中国それぞれに所蔵されている史料に基づいてこそ、東アジアの「伝統的思潮」の一つである仏教がいかにして「近代思潮」へと変容していくのかを描き出すことができる。

4. 研究成果

研究機関を通じて、台湾、中国、日本において、史料収集、及び現地調査研究を実施し

た。

2010年度は、本研究課題に関する初年度であったため、従来の研究成果を踏まえ、本邦における現地調査研究を進めるとともに、国内外の研究協力者と意見交換を行いつつ、本研究課題の問題設定、基本的な研究の方向性についての考え方の調整を図り、それに基づいて大まかな全体像の把握に努めた。

主な調査内容は以下の通り。

2010年5月27日～6月2日にかけて、北海道の札幌・苫小牧・寿都・函館などにおいて、台湾・福建への布教を積極的に行った曹洞宗・真宗大谷派などの宗派を中心に、布教使関連の資料収集を行った。特に植民地統治初期に重要な役割を果たした曹洞宗布教使佐々木珍龍に関する重要な資料を得ることができたことは、本研究の進展に大きな意義があった。植民地布教と北海道開拓に伴う布教との関連性を探求する意義を明確にすることができた。

また、2010年10月7日～16日にかけて、中華民国の仏教政策に関する史料収集の方向性を確定するため、中国から研究協力者である王鍵・中国社会科学院台湾史研究中心研究員を本邦に招聘し、岩手、東京等で共同して国内の資料収集を行いつつ、意見交換を行った。北京の中国社会科学院を中心に中華民国期の仏教政策関連史料所蔵に関する理解を深め、次年度以降の中国における現地資料調査の精緻化に有益な議論ができた。

2011年3月には、台湾の仏教史研究者と意見交換を行い、本年度の総括を行うとともに、次年度の計画を検討し作成した。

2011年度は、本研究課題に関する2年目であったため、2010年度の研究成果を踏まえ、本邦における現地調査研究を進めるとともに、台湾の研究協力者と意見交換を行いつつ、台湾における資料収集を集中的に行った。

主な調査内容は以下の通り。

2012年2月4日～9日、3月12日～21日にかけて、台北・台中・南投において現地資料収集、調査研究を進めた。台北においては、国立中央図書館台湾分館、及び国家図書館において、本研究と関連する先行研究、及び植民地行政機関の史料を収集した。台中・南投においては、宝覺禪寺など、日本各宗派と関係の深い寺院を訪問し、関係者からの聞き取り、及び文献調査を実施するとともに、国史館台湾文献館を訪問し、台湾総督府文書の閲覧・収集を行った。特に台湾総督府の宗教行政に関する重要な資料を得ることができたことは、本研究の進展に大きな意義があった。

また、国立台湾師範大学台湾史研究所蔡錦堂副教授等、台湾の宗教史研究者と意見交換を行い、本年度の総括を行うとともに、次年

度の計画を検討し作成した。

研究成果として、植民地布教研究において、通常、最も植民地統治勢力と近い存在であったととらえられる真宗大谷派について、宗門と植民地政府双方の史料を用い、その歴史の変遷について考察を加えた「植民地時期真宗大谷派在台湾布教的演變—台北別院落成的象徴意義—」(植民地期における真宗大谷派の台湾布教の変遷—台北別院落成の示す意義—)(『円光佛学院報』, pp.139-200, 桃園, 円光佛学院、平成23年12月)を発表した。

本稿では、日本植民地期における真宗大谷派の台湾布教の変遷について、とくに植民地統治開始直後から大正期、具体的には布教の中核を担う根拠地として設置された台北別院の成立及び新本堂建立までを中心に考察を行った。

まず、寺院や説教所の設立数や信徒数の変遷について数量的分析を行った。そこから、大谷派の台湾布教が、当初は本島人布教を中心に据えたものであったが、大正期以降、内地人布教中心へと変容したことが明らかになった。

また、大谷派は本願寺派と比べると、明治末から大正期にかけては教線をあまり拡大することができなかつたといえることもわかつた。大正末から昭和初期にかけて、徐々に信徒数が増加し教線も拡大していくが、その変化は布教の対象を内地人へと向けたことと呼応していた。大谷派や本願寺派が、植民地や外国へ移住した日本人を中心に布教を進めていくというこのような動きは、中国や朝鮮においても類似した傾向がみられる。海外布教が「開教」ではなく、日本人移民を檀越としてあてにする「追教」と呼ばれるゆえんはここにあるが、同様の現象が台湾でも発生していたのである。その一方で、設立された寺院数・説教所数、信徒数などは中国や朝鮮での状況と比較すると、非常に小規模であり、また、他宗派に比べてとくに積極的な布教を展開したとはいえないことも明らかになった。

次に、台北別院成立までの大谷派の台湾布教の歴史的展開を追ったが、そこには大谷派台湾布教の特徴を示すさまざまな事象が浮かびあがってきた。それらの特徴に従って、大谷派の台湾布教をおおまかに以下の5つの時期に区分した。

第一期は、出張布教による台湾布教のはじまりから台湾事務出張所の成立までの準備期、第二期は、台湾事務出張所を中核とした台湾布教体制の確立期、第三期は、台湾布教と南清布教をあわせ新布教区を作り出そうとする展開期、第四期は、新布教区の未確立による指揮系統の混乱による縮小期、そして、第五期は、布教対象としての内地人重点化に

よる基盤の再構築による再生期である。

多くの宗派にとっては、海外布教の最初の経験が台湾であるのに対し、大谷派はこれまで中国や朝鮮で得た経験を台湾にも投入することができた。最初の派遣者を元釜山別院輪番の太田祐慶にしたことは、十分に検討を加えた結果であろう。しかし、多くの宗派が従軍布教に引き続く形で台湾への布教を展開するのに対し、そのようないわば「慎重な」態度は結果として、着手に遅れをとり、教線の拡大という意味合いからは、デメリットとして働くこととなった。

そして、おくれながらも駐在布教を導入、台湾事務出張所を設置し、布教使を派遣して全台湾に布教を展開していく際に、もっとも重視したのは、台湾の人々への布教と教化であった。そして、そのための方策として取りあげられたのが、布教と教化を实践する場所を確保するという意味での末寺の獲得であった。それはとりもなおさず、後れた布教への取り組みを挽回することへとつながる方途となりうるものであった。

ところが、一定の成果を収めた末寺獲得を総督府に禁止され、大谷派は新たな形で全台湾へ布教の敷衍をめざさねばなくなる。もちろん、この段階ではあくまで布教の対象は台湾在来の本島人であった。そこで台北の事務出張所を中核とし、日本から派遣された布教使を台湾各地に派遣して拠点を作りつつ布教地域を拡大していくこととなった。

いまだ台湾島内の布教体制が完全に確立したわけではない中、本山から布教の新たな展開への方向性が示される。それは大谷瑩誠の台湾兼清国福建両広主教就任としての渡台というものであった。福建・両広地域への布教と台湾布教を一体化し、清国布教と台湾布教を連環させる新たな枠組みを生み出す可能性をもった試みであったともいえる。しかし、当初の企図とは異なり、そのような方途がもたらしたのは、布教管理・指揮系統が混乱する中での台湾における教線の縮小にほかならなかった。

しかし、大正期に入りその縮小が功を奏すこととなる。布教対象を内地人にしぼり、檀越としていく過程で、競争すべき他宗派が少ない地域や内地人が多い都市部を布教の拠点とする。そして、信徒の金銭面でのバックアップを受けつつ、まずは1919(大正8)年に宜蘭で蘭陽寺を成立させ、そして1921(大正10)年には台北別院を成立させる。そしてそれら寺院を根拠地に、次ぎの教線の拡大をめざしていくという再生過程が構築されてくるのである。

そして、その再生過程の結実として台北別院に建立されたのが、1928(昭和3)年11月に落成した本堂である。しかし、ようやく完成した本堂はわずか2年で火災により

焼け落ち、再び新本堂を建築しなければならなくなった。新本堂は1936(昭和11)年に入仏式を行うが、使用しはじめて10年足らずで敗戦を迎え、中華民国政府に接收され台湾省警備総司令部保安処として使用されることとなった。結果としてこの本堂は保安処として使われていた時期の方が、寺院として使用されていた時期よりも長い。そして台湾の人々は、この保安処となった建物を戦後も「東本願寺」と呼び続けることとなったのである。

このような事実直面した時、われわれは、大谷派台北別院の建物が戦前・戦後を通じ存在し続け、そこにこめられる意味やイメージは次々と変容・再生していつていることに気づかされることとなる。かかる状況下においては、大谷派の台湾布教が他地域の布教に比べて小規模であるか否か、大谷派の海外布教として代表性があるかどうかなどは、あまり問題にならない。小さくても大きくても、代表性があってもなくても、真宗大谷派台北別院の建物の姿そのものが、台湾の人々が会う唯一の大谷派であり、真宗であり、そして日本仏教ということになるのである。

大谷派は中国と朝鮮へ他宗派に先駆けて布教を展開したことで知られる宗派である。そのため、大谷派による中国や朝鮮への布教は、植民地統治機構による皇民化や宗教統制に対する協力、仏教の戦争責任と結びつけられ論じられてきた。しかし、本稿での議論を通じて、大谷派の台湾への植民地布教への取り組みははなはだ消極的であることが明らかになった。

2012年度は、本研究課題の最終年度に当たるため、これまでの調査・研究成果を踏まえつつ、引き続き本邦及び台湾など国外における現地調査研究を進めた。また、国内外の研究協力者と意見交換を行うとともに、本研究課題の全体像の把握と取りまとめを行い、国際シンポジウムにおいて成果について報告を行った。

主な調査内容は以下の通り。

2012年6月15日～18日に日本大学文理学部図書館及び国立公文書館などにおいて植民地統治史にかかる資料収集を行った。特に日本大学文理学部所蔵の旧「満洲」資料と台湾資料との比較検討が行えたことは、本研究の進展に大きな意義があった。

さらにこの間、来日中の中国・重慶市档案馆鄭永明館長との間で中国における植民地史資料の保存と整理について意見交換を行った。この点は、本研究課題の要点である日本・台湾・中国の3地間での関係を考察する際に、いかなる資料的制約があるのかについて了知するという点で意義深いものとなるとともに次の課題を導くものとなった。

また、2012年8月5日～14日に台湾

における史料収集を昨年度に引き続き行った。具体的には、台北、台中、台東などの日本仏教勢力の植民地布教と関連する寺院（東和禅寺、宝覚禅寺、東禅寺など）において、実地調査を行うとともに、国立中央図書館台湾分館（現国立台湾図書館）、国史館台湾文献館などにおいて資料収集を行った。その結果、日本、台湾、中国間の伝統の継承と近代的変容への考察においては、第二次世界大戦前後の寺院形態の変容の解明が重要な視角のひとつとなることを示す必要性が明らかとなった。

以上の調査研究を踏まえ、2012年11月9日～12日に中国・杭州に出張し、中国社会科学院近代史研究所中外関係史研究室主催の「第四届近代中外関係史国際学術シンポジウム」に参加し、本研究課題の総括的な報告を行い、関連研究者との意見交換を行った。本報告では、東アジアの近代化の過程において、日本・中国・韓国に共通して存在する「仏教」という宗教が相互にどのような交渉をもち、いかなる影響を与えあったのかということについて検討する必要性と、それを通じてこそ、東アジアにおける「伝統的思潮」の継承と近代的変容との間の因果関係が明らかになることを報告した。

また、2013年5月1日に大谷大学で開催された第21回日本近代仏教史研究会研究大会におけるシンポジウム『近代仏教』にとって、アジアとは何であったのか—植民地布教の展開・再考—にパネリストとして参加し、本研究課題の成果を取り込んだ報告を行った。本報告では、植民地期の台湾における日本仏教による活動や台湾社会への関与についての先行研究による成果、動向にどのような特徴があるのかについて概観し、日本側の研究と台湾側の研究にどのような論点が存在し、その間にどのような差異があるのか、そして、今後どのような展開の可能性があるのかについて検討を加えた。

今後の課題としては、上記から導きだされた分析に基づいて、東アジアの「伝統的思潮」のひとつである仏教がどのようにして「近代的思潮」へと変容していくのか、そのモデルについて検証し、理論的枠組の精緻化を行うことが必要である。そうすることによって、従来看過されてきた近代東アジアにおける「伝統的思潮」の相互交渉と変容について明らかにすることが可能となるのであり、今後も史料収集、調査を継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①松金公正、「殖民地時期真宗大谷派在臺灣布教的演變—臺北別院落成的象徵意義—『圓光佛学院』18、139-196頁、2011年、査読有

〔学会発表〕(計5件)

①松金公正、「台湾における植民地布教の展開に関する研究の動向」、第21回日本近代仏教史研究会研究大会シンポジウム『近代仏教』にとって、アジアとは何であったのか—植民地布教の展開・再考—、2013年5月11日、日本・京都（大谷大学）

②松金公正、「日本・中国・台湾間の仏教における伝統の継承と近代的変容」、第四届近代中外関係史国際学術研討会、中国社会科学院近代史研究所中外関係研究室、2012年11月10日、中国・杭州

③松金公正、「日本佛教對台灣佛教的影響—日治與戰後—」、從清代、日治到當代台灣佛教—台灣佛教論壇、圓光佛学院、2011年1月9日、台湾・桃園

④松金公正、「日本における宗教史研究の中での台湾—研究される台湾、研究されない日本—」、日本研究論壇—台日相互理解的思索與實踐、國立台灣大學、2010年12月2日、台湾・台北

⑤松金公正、「真宗大谷派台北別院之『戦後』—有關在臺灣對於日本佛教的印象形成—」、台灣史研究論壇—台灣光復六十五周年暨抗戰史實學術研討會、中国社会科学院台湾史研究中心、2010年11月6日、中国・重慶

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松金 公正 (MATSUKANE KIMIASA)
宇都宮大学・国際学部・教授
研究者番号：50334074

(2) 研究分担者

なし。

(3) 連携研究者

なし。

(4) 研究協力者

王 鍵 (WANG JIAN)
中国社会科学院・台湾史研究中心・研究員
今井 淳雄 (IMAI ATSUO)
宇都宮大学大学院・国際学研究科・博士後期課程院生
大野 育子 (ONO IKUKO)
宇都宮大学大学院・国際学研究科・博士後期課程院生
高橋 里衣 (TAKAHASHI RII)
宇都宮大学大学院・国際学研究科・博士前期課程院生